



〈春の祭典〉初演時の舞台写真

生と死の舞踊

喜多尾道冬

原始の生け贄の祭り

読売日本交響楽団の4月公演にストラヴィンスキー〈春の祭典〉、ラモー〈ダルダニウス〉組曲、チャイコフスキー〈くるみ割り人形〉、ベートーヴェン交響曲第7番、マーラー交響曲第9番が含まれる。これらには、その後公演予定のラヴェルの〈ラ・ヴァルス〉を加え、舞踊のリズムがこだまし合っている。

〈春の祭典〉は、古代ギリシャのディオニソス信仰や古代アステカ帝国の太陽信仰に似たロシアの原始宗教の体裁をとって、舞踊、生け贄、儀式的オルギー（乱痴気騒ぎ）で進行する。舞踊は硬直した日常の生をリフレッシュする。生け贄は自然神のご機嫌をと

り結ぶために捧げられる。儀式は集団によるその意思統一だ。

生け贄の儀式が進化すると、死は生の最大のクライシスであり、またクライマックスでもあるという認識が芽生えてくる。すると、生の発揮には死の強調がふさわしいという逆説が生け贄の儀式に入りこんでくる。舞踊が加わることで生の高揚が強められ、それを集団で行うことで生と死のドラマは最高の盛り上がりを見せる。

そのドラマは、炎がはげしく燃え上がり、最後に消えてゆく燃焼過程に似ていないだろうか。生と死が炎のようにひとつに融け合うドラマは、〈春の祭典〉で極彩色のひびきと刺激的なリズムでたどられる。

古代アステカ帝国では、生命力をあらわす赤い太陽が沈むのは死を意味し

た。その恐怖を避けるために、大量の生け贄の心臓をえぐって流れ出るおびただしい赤い血で太陽を呼び戻そうとした。そのとき、だれもが狂ったように踊りまくったという。

〈春の祭典〉はこの生け贄の儀式に似通う。生の高揚を実感するには生を犠牲にしなければならないという残酷な逆説。音楽と舞踊はそれをあおる一方、儀式は人身御供への厳粛な悼意をあらわし、聖化する役割を担う。

舞踏の聖化

文明が進むと生け贄の風習はしだいに遠い風景になり、舞踊と儀式は手をたずさえ、原始的なオルギーを秩序化・洗練化しはじめる。ラモーの〈ダルダニウス〉組曲では、フランスの地方で生まれたメヌエツトやガヴォツトなど、野趣に富む民俗舞踊が宮廷向きの典雅な装いを得て、浮世の憂さを忘れ、神話の世界に遊ぶ愉悅に読み替えられる。そして、当時忘れられかけていた神話を現世の出来事のようにリフレッシュすると同時に、宮廷文化を神話化・祭礼化する役割も担った。

ベートーヴェンの交響曲第7番は「舞踏の聖化」と呼びならわされている。ウィーン古典派の生んだ交響曲は、旧秩序に代わって市民社会のヒュ

ーマンな理念を掲げる音楽形式だ。その交響曲にフランスから拝借したメヌエツトが組みこまれている。だが、それは音楽を生気づける原動力になるにはエレガントになりすぎて、野性的な活力を失いかけていた。

ベートーヴェンを境に、メヌエツトはもっと鮮度のあるスケルツォに道を譲ってゆく。交響曲第7番は新時代のリズムを模索する実験の場となるだけでなく、ヒューマンな理念にふさわしい高邁なリズムの創造を目指した。「舞踏の聖化」という呼称はそこに由来する。

ワルツの盛衰

メヌエツトの形骸化と入れ替わりに、^{どくおう}独塊圏で新しい舞曲ワルツが市民社会の発展に添い寝しながら隆盛をきわめてくる。ワルツは男女が抱き合い、スピーディに踊りまわる舞曲で、エロスの解放に突き進む導火線になった。いくら活力に満ちていても、むき出しのエロスを市民理念の高邁な^{ひょうぼう}標榜である交響曲にとりこむのははばかれる。ベルリオーズの〈幻想交響曲〉は別として、元祖独塊圏では敬遠され、ワルツの前身の素朴なレントラーに姿を変え、スケルツォの仮面をつけてロマン派の交響曲に入りこんでくる。

マーラーのほとんどの交響曲にスケルツォがとり入れられている。だが、それはレン



「狩人の野辺送り」の絵
マーラー交響曲第1番の第3楽章の発想のもとになったとされる

トラの隠れ衰^{みの}。ときにはメヌエツトも織りまぜ、メヌエツト→レントラー(ワルツ)→スケルツォという舞曲の玉虫色^{こんぼう}の混紡の発展を印象づけるほどだ。その結果、交響曲第9番には歪みに歪んで奇怪になりはてたりズムが立ちあられ、音楽の活力^{ゆが}を司るはずが硬直化とグロテスク化を余儀なくされている。

一方、マーラーの第9番とはほぼ同時期に作曲されたラヴェルの〈高雅にして感傷的なワルツ〉は、洗練化の果ての衰弱を暗示する。約10年後の〈ラ・ヴァルス〉は、マーラーが懸命につなぎとめようとしていたワルツの活力を失い、安楽死で有終の美を飾る。もはやワルツなど踊るものはいない。残るのは哀惜の念だけ。

死の舞踏

マーラーの生涯は死の強迫観念との戦いの連続だった。交響曲第1、2、5

番は葬送の、第6番は死の行進をひびかせ、第4番の第2楽章は「死の舞踏」と呼ばれることもある。

「死の舞踏」にはちょっとした歴史がある。14世紀のヨーロッパではペスト^{しょうけつ}が猖獗^{しょうけん}をきわめ、人口の3分の1もが犠牲になったという。当時の人々には「死」がわがもの顔にふる舞い、踊り狂っているように見えて、「死の舞踏」の壁画があちこちに描かれた。

リストはそんな壁画やホルバインの木版画「死の舞踏」を眼にして、中世の〈怒りの日〉の旋律をもとにいくつかの〈死の舞踏〉を生んだ。彼の友人サン＝サーンスもそれにあやかって交響詩〈死の舞踏〉をものし、ムソルグスキーも〈はげ山の一夜〉で〈怒りの日〉をひびかせた。

マーラーの交響曲もこのモチーフと地下水脈をとにもにする。R. シュトラウスのオペラ〈エレクトラ〉や〈サロメ〉、ラフマニノフの交響詩〈死の島〉もこの系譜に属し、世紀転換期の重要なモードになった。当時の産業社会の

急速な発展が生^{せい}の過剰な氾濫(バブル)を招き、それが火山の上の踊りのイメージを生んで、「死の舞踏」を呼び覚ましたのではなかったか。

「死の舞踏」の余波は〈はげ山の一夜〉だけでなく、彼の4曲からなる歌曲集〈死の歌と踊り〉にもおよぶ。どの曲にも死の匂いが立ちこめ、とくに第3曲「トレパック」はスラヴの土の臭いのする舞曲、西欧で隆盛をきわめたワルツの向こうを張る。

チャイコフスキーは西欧文化への心酔から、その音楽技法をロシアに移植して王朝風^{けんらん}の絢爛豪華な衣装をまとわせた。彼の〈くるみ割り人形〉は原作をドイツのホフマンに、台本を『椿姫』で知られるフランスのデュマ・フィスに求めた国際的なバレエ音楽で、ワルツが主役。スペインやアラビア、中国の踊りが、ムソルグスキーの「発見」したトレパックともどもバックダンサーとして主役を盛り立て



ホルバインの木版画「死の舞踏」

る。管弦楽法は西欧風にきらびやかながら、スラヴ生まれの野性的なトレパックはエレガントなワルツと対照だ。

現代の生け贄の祭り

その後、トレパックは形を変え、これまた地下水脈をくぐってプロコフィエフやショスタコーヴィチらに受けつがれる。そして、マーラーのレントラー楽章に似た奇怪なステップを踏み、旧ソ連の苛酷な政治体制の歪みを暗におちくるピエロの身ぶりになった。

その体制の虎口から辛くも逃れたストラヴィンスキーは、〈春の祭典〉で原始の舞踊に祖先返りしているかに見える。だが、この舞踊音楽は第1次大戦前夜に作曲され、古代アステカ帝国^{むさぼ せい じん}さながら大量の生け贄を貪る凄惨な戦争、つまり現代のマモン神への新しい生け贄の祭りの予言の役割もはたした。

原始社会では戦の前に戦意高揚の踊りが行われた。死のクライシスへの武者ぶるいがいつしか舞踊に進化したのだろう。生と死の瀬戸際に直面して高ぶる心臓^{どうき}の動悸は今も昔も変わらない。それが〈春の祭典〉に生々しく脈打っているのを聴き逃すものはいないだろう。

(きたお みちふゆ・ドイツ文学者)

心に残るクラシック

加藤一二三 ①

Hifumi Kato

良い将棋を指したい

モーツァルト：レクイエム 二短調 K.626



©読売新聞社

私がクラシック音楽をとりわけ熱心に聴くようになったのには、ひとつのきっかけがありました。1982年、42歳の時に将棋の第40期名人戦で、中原誠名人に3度目の挑戦をしました。7番勝負ですから、対局の合間に1週間くらい時間が空きます。その間をどう過ごすかがとても大事です。その時に、私は自宅でモーツァルトのレコードを聴きました。中でも〈レクイエム〉を繰り返しかけて、精神の集中を図ったのです。

音楽にはいろんなタイプがあります。それまでは、主にロマン派の曲を聴いていました。メンデルスゾーンやショパンなどは、聴いていると気分が高揚してきて、「攻め」の気持ちになる。気持ちを盛り上げることも大事です。ところが、その時は、ただ静かに感覚を研ぎ澄ませて、ひたすら「良い将棋を指したい」と願ったのです。無心で戦う、そんな境地ですね。そうい

う時、自分にはモーツァルトが合っているということに気がつきました。

なぜ、〈レクイエム〉だったのか。ひとつには宗教曲だったということもあったかも知れません。私は30歳の時にカトリックの洗礼を受け、常日頃から神様のお恵み、お助けによって自分の将棋を昇華させていると思っています。〈レクイエム〉は死者のためのミサ曲ですけど、神様にお祈りを捧げる真摯な気持ちが、将棋を指す時の心構えに通じるものがあるのでしょうか。名人戦史上に残る対局の末、初めて名人位を獲得したのですが、あの時の勝利はモーツァルトのお陰だったと思っています。

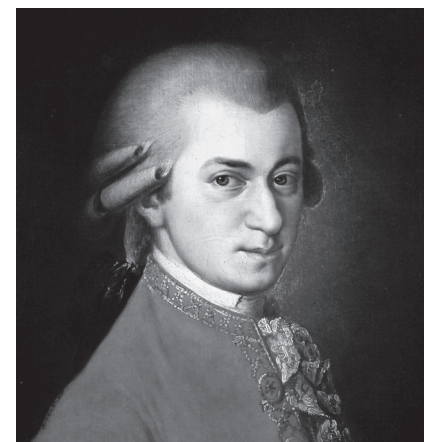
将棋は相手が必要ですが、モーツァルトは自分ひとりで、あのメロディーを創り出したわけでしょう。本当に素晴らしい。天才以外の何者でもない。将棋は勝負事ですから、勇気を持ち、ためらいなく、落ち着いて勝負に臨む

心構えはもちろん大事です。でも、ああいう優れた芸術に触れると、勝ち負けではなく、自然と「良い将棋を指したい」と思えるようになるのです。なぜでしょうね。

モーツァルトはほかにも好きな曲がたくさんあります。〈戴冠ミサ曲〉や〈大ミサ曲〉には、いつも励まされています。ああいう曲を聴くと、普段以上の力を発揮して、将棋でも常識を上回る指し手を思いつくのです。心の動きが音楽と一致している。そんな感じでしょうか。それからオペラ。〈フィガロの結婚〉〈魔笛〉〈後宮からの誘拐〉……。〈後宮からの誘拐〉のあの出だしの掛け合い（第1幕第2場、ベルモンテとオスミンの二重唱）が大好きです。何度聴いてもまったく退屈しません。

映画『アマデウス』で、モーツァルトが皇帝ヨーゼフ2世の前でピアノ協奏曲第22番の第3楽章を弾き振りするシーンがあって、妻のコンスタンツェがそれを幸せそうに聴いている。それを見て、夫婦愛っていいなあと。それと、この曲は変ホ長調です。変ホ長調は「英雄」の調性と言われているので、ベートーヴェンの交響曲第3番〈英雄〉もピアノ協奏曲第5番〈皇帝〉も同じ調性です。何かそういう英雄的なものへのあこがれが、自分の中にあるのかも知れません。

コンサートに行ったり教会で歌った



モーツァルト（1756～91）

り、音楽は私にとって身近な存在です。ウィーン・フィルの演奏を聴けば感動するし、クリスマスに教会で賛美歌を歌えば人生の喜びを感じる。

ある時、知り合いの棋士が来日中のウィーン・フィルのメンバーに、私が〈レクイエム〉を聴いて名人戦に勝ったという話をしたら、彼らは「われわれは〈レクイエム〉をそんなふうには聴かない」と驚いていたそうです。彼らからすれば、死者のためのミサ曲を聴いて勝負に臨むなんて不思議なのでしょう。でも、音楽の聴き方に決まり事はありません。私はすべての音楽は、神様が作曲家に与えたインスピレーションだと思うのです。（聞き手・事務局）

profile かとう・ひふみ

1940年福岡県生まれ。14歳で当時史上最年少の中学生プロ棋士となる。史上最速でA級八段に昇段し、82年に名人位に就く。公式戦対局数は2,505局で歴代1位。バラエティ番組にも多数出演し、お茶の間の人気者になっている。

◎クラリネット奏者

芳賀史徳

Fuminori Haga

理想の音色を求めて 日々研究です

「4月の公演では、マーラーやストラヴィンスキーの曲で、クラリネットが活躍します」

フランス留学中に聴いたコンサートが今でも忘れられません。それは、エッセンバッハ指揮のバリ管弦楽団によるマーラー交響曲第9番でした。第1楽章の終盤に出てくるエスクラリネット (Es/変ホ管) のソロで、衝撃的な音が飛んできたのです。エスクラリネットは明るくて華やかな音が特徴ですが、その時聴いたのはとてつもなく美しく、静かな音色で、「こんな音も出せるんだ」と思いました。その時の感動が、「オーケストラで今後生きていこう」という決意を後押ししたような気がします。今回、その曲を演奏できることは感慨深いものがあり、とても嬉しいうれいです。

もう一つは、ストラヴィンスキーの〈春の祭典〉。エスクラリネットのソロが多く、しかも効果的に使われている珍しい曲です。そして、変拍子でリズ

ムがひんぱんに変わりとても難しい。大曲が続くこの4月は、自分にとって大きな試練ですね。

また、世界的なクラリネット奏者、メイエの来日も楽しみです。これまでに、何度も彼のリサイタルに出かけたことがあり大ファンなのですが、実は大学4年生の時、メイエの公開レッスンを受けているのです。1小節ごとに止められて、とにかく厳しい指導だったことをよく覚えています。初めての共演は、大変光栄ですし、待ち遠しいばかりです。そして、ドビュッシーの第1狂詩曲をオーケストラと演奏するのは珍しいので、こちらも聴きものだと思います。

「今月のもう一つの注目は、常任指揮者カンブルランの登場です。任期9年の締めくくりである今年度初めに、6公演のタクトを振ります」

現代音楽が好きなので、フランス留学中も、現代音楽が得意なカンブルランに注目していました。フレーズの感じ方やアーティキュレーションなどが、フランス的でオシャレなセンスに満ちています。マエストロとの最初の出会いは、読響へ入団する前の試用期間中に演奏したシューベルトの〈グレイト〉。最後に向かって覚醒していく



リズムの切れが秀逸です。これからも、いろいろな曲で共演できることを願っています。

「宮城県出身の34歳。東京芸術大学卒業後、フランスのオーベルヴィリエ・ラ・クールヌーヴ地方国立音楽院に2年間留学。日本音楽コンクール入選や日本管打楽器コンクール第1位などの受賞歴がある。日本フィルハーモニー交響楽団を経て、昨秋に読響に入団しました」

6歳からピアノを習い始めましたが、中学1年生の時に吹奏楽部に入り、同じく吹奏楽をやっていた姉の勧めでクラリネットを初めて手に取りました。すぐに楽しくなり、近くの楽器店がやっていた教室に通い始めました。仙台フィルの奏者が教えに来てくださっていて、本格的に取り組むようにな

りました。

プロを目指すきっかけは、芸大2年生の時に出会った恩師・亀井良信先生。面談の際に聴いたそのクラリネットの音色が衝撃的でした。まさに自分の理想の音。言葉で表現するのはなかなか難しいのですが、恩師の理想的な音と響きを聴けなかったら現在の自分はないと言ってもいいぐらいです。今でもその音に近づけるよう努力しています。留学先も、同じくフランスに留学されていた先生の影響を受けました。読響での目標を聞かせてください」

何と言っても、聴いていて癒される温かくて柔らかい音色。それだけでなく、力強い音も出せて、また、音の大きさの幅を持っているのがクラリネットの魅力です。

読響は、すべてにおいてレベルが高く、透明感があって素晴らしいオーケストラだと思っていたので、入団してとても幸せです。お互いによく聴いて、繊細なアンサンブルを作っています。それがまったくストレスなく、自由にできることが、何より素晴らしい。しかし、もっと自分のレベルを上げていかないと、とも感じています。テクニックはもちろんのこと、音楽の発想力も深めなければなりません。日々勉強と研究。その先に、ソロ活動もできたら、と思っています。

新鋭ショハキモフが振る《ラフマニノフ&チャイコフスキー》

4/28 (土) 14:00 第207回 土曜マチネーシリーズ
東京芸術劇場コンサートホール

4/29 (日) 14:00 第207回 日曜マチネーシリーズ
東京芸術劇場コンサートホール

ムソルグスキー (リムスキー=コルサコフ編): 交響詩〈はげ山の一夜〉
ラフマニノフ: ピアノ協奏曲 第2番
チャイコフスキー: 交響曲 第5番
指揮: アジス・ショハキモフ ピアノ: ガブリエラ・モンテロ



アジス・ショハキモフ

ウィーン・フィルの女性コンマス、ダナイローヴァが共演

5/15 (火) 19:00 第612回 名曲シリーズ
サントリーホール

ロッシーニ: 歌劇〈ウィリアム・テル〉序曲
グラズノフ: ヴァイオリン協奏曲
チャイコフスキー: 交響曲 第6番〈悲愴〉
指揮: ヤデル・ビニャミーニ ヴァイオリン: アルベナ・ダナイローヴァ



ヤデル・ビニャミーニ

鬼オヴォルコフが華麗に響かせる名曲〈展覧会の絵〉

5/20 (日) 14:00 第104回 みなとみらいホリデー名曲シリーズ
横浜みなとみらいホール

ブラームス: 大学祝典序曲
メンデルスゾーン: ヴァイオリン協奏曲
ムソルグスキー (ラヴェル編): 組曲〈展覧会の絵〉
指揮: イラン・ヴォルコフ ヴァイオリン: クロエ・ハンスリップ



イラン・ヴォルコフ

〈不安の時代〉&〈革命〉、20世紀の“魂の叫び”を聴く!

5/30 (水) 19:00 第578回 定期演奏会
サントリーホール

プロコフィエフ: アメリカ序曲
バーンスタイン: 交響曲 第2番〈不安の時代〉
ショスタコーヴィチ: 交響曲 第5番
指揮: イラン・ヴォルコフ ピアノ: 河村尚子



河村尚子

4月5月 公演の聴きどころ

4月28、29日の《マチネーシリーズ》では、ベルリン・ドイツ響やドレスデン国立歌劇場管へのデビューを成功させたウズベキスタン生まれの新鋭ショハキモフが、チャイコフスキー交響曲第5番などを振る。弱冠21歳でマーラー国際指揮者コンクール第2位に入賞した新星の、エネルギーに満ちた演奏に期待が高まる。ピアノ協奏曲では、アルゲリッチも認めた即興の天才モンテロが、ラフマニノフの人気曲・第2番を独特のセンスで弾きこなす。

5月15日の《名曲シリーズ》では、欧米の歌劇場でキャリアを積み、本年9月にはローマ歌劇場を率いて来日するイタリアの新鋭ビニャミーニがチャイコフスキー〈悲愴〉に熱い魂を込める。イタリア人らしい歌心にあふれた快演となるだろう。グラズノフのヴァイオリン協奏曲では、名門ウィーン・フィル史上初の女性コンマスを務めるダナイローヴァが、民俗色豊かで美しい叙情的な旋律を、艶やかな音色で歌い上げる。

5月後半には、アイスランド響の音楽監督などを歴任してきたイスラエル生まれの鬼オヴォルコフが読響に初登場。古典派から現代作品まで幅広いレパートリーを誇るヴォルコフは、まず20日の《みなとみらいホリデー名曲》で、〈展覧会の絵〉などの名曲から独自の解釈によって新鮮な表情を引き出す。メンデルスゾーンのヴァイオリン協奏曲では、完璧なテクニックと深い洞察力を持つ実力派ハンスリップが登場し、流麗なソロで聴衆を魅了する。

30日の《定期》には、二人の作曲家が命をかけて書いた二つの交響曲、バーンスタイン〈不安の時代〉とショスタコーヴィチ〈革命〉が並ぶ。激動の時代を生き抜いた両者の魂の叫びを、ヴォルコフが鮮烈なタクトで露わにする。生誕100周年を迎えたバーンスタインの作品のピアノ・ソロには、ドイツを拠点に活躍する実力派の河村尚子が挑む。

(文責: 事務局)

読響チケットWEB

検索

“カリスマ”井上道義の〈田園〉&チェロの宮田大が共演

6/3 (日) 15:00 第10回 パルテノン名曲シリーズ
パルテノン多摩大ホール

ドヴォルザーク：チェロ協奏曲
ベートーヴェン：交響曲 第6番〈田園〉

指揮：井上道義
チェロ：宮田 大



宮田 大

欧州の歌劇場で活躍するマイスターが指揮する R. シュトラウス

6/19 (火) 19:00 第579回 定期演奏会
サントリーホール

R. シュトラウス：交響詩〈ドン・キホーテ〉
R. シュトラウス：歌劇〈カプリッチョ〉から前奏曲と月光の音楽
R. シュトラウス：歌劇〈影のない女〉による交響的幻想曲

指揮：コルネリウス・マイスター（首席客演指揮者）
チェロ：石坂団十郎
ヴィオラ：柳瀬省太（読響ソロ・ヴィオラ）



コルネリウス・
マイスター

マイスター得意のドヴォルザーク&長原幸太が弾くブルッフ

6/23 (土) 14:00 第105回 みなとみらいホリデー名曲シリーズ
横浜みなとみらいホール

スメタナ：歌劇〈売られた花嫁〉序曲
ブルッフ：スコットランド幻想曲
ドヴォルザーク：交響曲 第8番

指揮：コルネリウス・マイスター（首席客演指揮者）
ヴァイオリン：長原幸太（読響コンサートマスター）



長原幸太

音楽史に燦然と輝く傑作！ マーラーの合唱付の大曲〈復活〉

6/28 (木) 19:00 第613回 名曲シリーズ
サントリーホール

6/29 (金) 19:00 第20回 大阪定期演奏会
フェスティバルホール(大阪)

マーラー：交響曲 第2番〈復活〉
指揮：コルネリウス・マイスター（首席客演指揮者）
ソプラノ：ニコール・カベル
メゾ・ソプラノ：アン・ハレンベリ
合唱：新国立劇場合唱団（合唱指揮＝富平恭平）



アン・ハレンベリ

“コバケン”渾身のチャイコフスキー&名匠ヴィルサラーゼが共演

7/5 (木) 19:00 第580回 定期演奏会
サントリーホール

ベートーヴェン：ピアノ協奏曲 第1番
チャイコフスキー：マンフレッド交響曲

指揮：小林研一郎（特別客演指揮者）
ピアノ：エリソ・ヴィルサラーゼ



小林研一郎



エリソ・
ヴィルサラーゼ

フランスの俊英モルローとジャズ界の鬼才・小曽根真の熱いライブ！

7/28 (土) 14:00 第208回 土曜マチネーシリーズ
東京芸術劇場コンサートホール

7/29 (日) 14:00 第208回 日曜マチネーシリーズ
東京芸術劇場コンサートホール

ガーシュイン：キューバ序曲
ガーシュイン：ラプソディ・イン・ブルー
ドビュッシー：牧神の午後への前奏曲
エネスコ：ルーマニア狂詩曲 第1番
ラヴェル：バレエ音楽〈ダフニスとクロエ〉 第2組曲

指揮：ルドヴィク・モルロー
ピアノ：小曽根 真



ルドヴィク・モルロー



小曽根 真

お申し込み・
お問い合わせ

読響チケットセンター 0570-00-4390

(10:00～18:00／年中無休)

ホームページアドレス <http://yomikyo.or.jp/>

こんなに便利！ 読響チケットWEB

読響チケットWEBは、インターネットから読響のチケットをお求めいただける専用ウェブサイトです。24時間いつでもお申し込みができ、ご自身で好みの座席をお選びいただけます。以下のURLもしくは公式ウェブサイトのトップページ【読響チケットWEB】のボタンから、ぜひご利用ください。

読響チケットWEB <http://yomikyo.pia.jp/>

※ 初回お申し込み時は利用登録（無料）が必要です。

パルテノン多摩 GW スペシャル ファミリーコンサート

■5/6(日) 15:00 パルテノン多摩 大ホール

指揮：海老原光

[この曲、知ってる! ～運動会と校内放送～]

ドヴォルザーク：家路(交響曲第9番〈新世界から〉第2楽章から)、ユーモレスク、
ハチャトゥリアン：剣の舞、スッペ：軽騎兵序曲 ほか

[懐かしい! ～あの頃の音楽の授業～]

ロッシーニ：〈ウィリアム・テル〉序曲から“スイス軍の行進”、
マリー：金婚式、ケテルビー：ベルシャの市場にて ほか

[料金] 一般 ¥2,500 学生 ¥1,000 小・中・高校生 ¥500

[お問い合わせ] チケットパルテノン 042-376-8181 (休館日を除く10:00～18:00)

〈コンポージアム2018〉ウンスク・チンの音楽

■5/24(木) 19:00 東京オペラシティ コンサートホール

指揮：イラン・ヴォルコフ

クラリネット：ジェローム・コント チェロ：イサン・エンダース

ウンスク・チン：マネキン(2014-15)、クラリネット協奏曲(2014)、
チェロ協奏曲(2006-8, rev. 2013) ※すべて日本初演

[料金] 一般 ¥3,000 学生 ¥1,000

[お問い合わせ] 東京オペラシティチケットセンター 03-5353-9999

読売日本交響楽団 特別演奏会 千葉公演

■6/2(土) 15:00 千葉県文化会館 大ホール

指揮：井上道義 チェロ：宮田大

ドヴォルザーク：チェロ協奏曲、ベートーヴェン：交響曲第6番〈田園〉

[料金] S ¥6,000 A ¥5,000

[お問い合わせ] 千葉県文化会館 043-222-0201

ミュージカル・ミーツ・シンフォニー 2018

■6/7(木) 19:00、6/8(金) 19:00 オーチャードホール(東京)

6/9(土) 17:30 フェスティバルホール(大阪)

指揮：円光寺雅彦

出演者：ノーム・ルイス、ジョン・オーウェン=ジョーンズ、春野寿美礼、
柿澤勇人、宮澤エマ

〈レ・ミゼラブル〉〈オペラ座の怪人〉などミュージカルの中から抜粋

[料金] 東京公演：SS ¥11,800 S ¥9,800 A ¥8,800 大阪公演：S ¥11,800 A ¥8,800

[お問い合わせ] 読売新聞東京本社文化事業部 03-3216-8500 (平日11:00～18:00)